
ごちゃまぜ：その3

のみのみの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごちゃまぜ：その3

【Nコード】

N3510F

【作者名】

のみのみの

【あらすじ】

これから書こうと思っている小説の、予告編であったり、以前書いた小説の、サイドストーリー、つばいのだったり。まあ、これだけを読むのも、面白い、はず。「その3」とありますが、1話完結ですし、「その1」や「その2」との関係は、無い・・・のかな？

「ねえ、奈々子ってさ、付き合ってる人とかいるの？」

「えっ？ なに、急に」

「いやさ、最近奈々子、色っぽくなっただっていうか、女がでてきたっていうか」

「そ、そんな事無いよ。変わってないもん」

「本当かな？」

「ほんとだよ」

二年四組の教室で見詰め合う二人の女子。

じーっ。

じーっ。

数秒の後、頬を膨らませかつ赤くした蕨奈々子が目を先にそらした。

「やっぱり。いるんだ。で、どんな人？」

「えっちゃん、言えないよ、そんなこと」

対する九柳穂歩映見は机に乗り出して奈々子に迫る。

「言ってごらん」

「でも」

「大丈夫。言いふらさないから」

「ほんと？」

「本当よ。賭けても良いわ」

内心、何によ、と突っ込む奈々子。

「それで、誰なの？」

「んっと、一年の」

「うっそ、後輩！」

穂歩映見が大声を出したせいで、クラスにいたほとんどが二人を見た。

「ちよっと、えっちゃん。大声出さないで」

「あ、ごめんごめん」

穂歩映見は声を潜める。

「それで、いつからなの？」

「えっと、文化祭？」

「なによ、？って」

「いや、告白されたのはもう少し前だったような？」

「あんた、ちゃんとそんな事ぐらい覚えておきなさいよ」

「ごめーん」

「まあ、いいわよ。幸せなら、ね。で、名前は？」

「高橋君」

「だれ、それ」

「あ、あの、苑崎先輩の、幼馴染、らしいですよ」

「夏見君先輩の？」

「うん」

「あの夏見君先輩の、幼馴染。うーん、想像できないな」

首を振ったせいで乱れた髪を、手櫛で軽く直す穂歩映見。

「で、名前は？ 名字じゃないほうね」

「えっと、原琉君。草原の原に、王偏に流れるの旁」

「なんか、けつたいな名前」

「どうして？」

「だって、もとる、でしょ。inhuman。つまり非人道的な
て言う事でしょ。まあ、超人的なっていう意味も無い事は無いけど」

首を思いつき横に振る奈々子。

「そんな事無いよ。原琉君、すごく優しいし、かつこいいし、笑
顔が」

頬に手を当てる奈々子。

「どうしたの、奈々子。原琉君の笑顔が、どうしたの？」

「ううん、何でも無い。それよりさ、睦子お姉ちゃん、音大受ける
んだって。凄いよねー」

こいつ、すごく下手に話を逸らしやがった。と思う穂歩映見。

「うん、確かに。で、原琉君の笑顔が」

「でさ、それがさ、国立のだよ。もう、将来は音楽家決定だよね」
そんなに簡単な話ではないと思うが、ここは合意する穂歩映見。

「そうだねー。で、原琉君の」

「私は何にしようかなー。ねえ、えっちゃんは決めてる？ 進路」

「ううん。で、原」

「私はね、国立の文」

「殺人的なんでしょ？」

「はひ！??！」

「凶星？」

「見ちゃ駄目です。絶対、駄目」

「いいいいいよ、どうせ見れないだろうし。あの高橋原琉君でしょ」

この言葉を聞いて違和感を感じた奈々子。

「知ってるの？」

「うん、勿論。あの夏見君先輩なつみんの幼馴染といたら、彼しかないでしょ」

「知ってたのー！」

「勿論よ」

「騙したー」

奈々子は、穂歩映見の頭を軽く、しかし何度も叩く。

「痛いよ」

「痛くないくせにー」

「ああー、もう。悪かった。まあ、あの高橋君の裏話を、ちょこつとだけでも聞けたら、と思ってな。まさか彼女がいたなんて」

「秘密にしてくださいよ」

「勿論。といつても、誰も信じないだろうけどな」

「ほえ？ どういう事ですか？」

「まさか奈々子よ、知らないとも言つつもりか。この学校に近頃噂される、生徒七不思議を」

「7、不思議？」

「そう。一つ、何でも知ってる新聞部部长。二つ、何でもやりこなす日高春見。三つ、未来を予知する佐々木萌子。四つ、図書室に住み着く高橋原琉。五つ、魔法を使える結城神無。六つ、突然いなくなつた瀬戸海幸助。七つ、十二人姉妹の蕨一家」

「なんで、私たちまで？」

「だって、十二人姉妹よ。一人ぐらい男がいたっていいものだし、しかもみんな年子だし、名前が明らかに狙ってるし」

「それじゃあ、図書室に住み着く、原琉君って言うのは？」

「うん。これが本題ね。彼、授業に出てないっていう、もっぱらの噂でね。なんだか、休み時間はいつも図書室にいるのが目撃されるの。しかも、放課後は図書室が閉まる五時まで。まあ、これは七月に入ってからだから、あの六月の事件とは何の関わりも無いらしいんだけどね。んで、夏休み中もいたみたいで、図書室の雷事件を間近で目撃した人の内の一人」

穂歩映見のマシンガン（本物？）トーク炸裂中。
しばらくお待ちください。

（画面がどこかの菜の花畑に切り替わる）

.....

（そして再び教室へ）

「と言う訳なの。で、最後の七つ目は」

キーン コーン カーン コーン

ここぞとばかりに立ち上がる奈々子。

「ああ、もう授業始まるよ。また後で聞くから。それじゃあ、席に戻るね」

「あ、もうそんな時間か。うん。またねー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3510f/>

ごちゃまぜ：その3

2010年10月15日22時46分発行